

P-169 周産期における痙攣症例に画像診断は有効か？

兵庫・姫路赤十字病院

青江尚志, 太田雅博, 河原伸明, 繁田浩三, 赤松信雄

【目的】当科で経験した周産期の痙攣症例を検討し、頭部の器質的変化との関連性を検討する。【方法】平成10年以降当科で痙攣発作を認めた症例のうち癲癇を除外した8症例を対象とした。【成績】症例は全例紹介入院であり、その内訳は妊娠中の痙攣重積1例、妊娠子癇4例、分娩子癇1例、産褥子癇2例であり、産褥子癇の1例を除き7例の分娩様式は帝王切開術であった。痙攣重積症例は21歳、妊娠32週0日の初産婦で脳動脈瘤術後であり、帝切（児体重は1466g,1分後 Apgar score は2点）後の頭部 CT（入院翌日）で側脳室内と右側頭葉に広範な出血を認め動脈瘤の再破裂と診断したが、術後5日目に死亡に至った。子癇症例の年齢は 28.9 ± 3.1 歳（平均 $\pm$ 標準偏差）、入院時の血圧は $174 \pm 30/104 \pm 19$ mmHg であり、分娩週数は 38.4 ± 1.5 週、児体重は 2597 ± 483 g, 1分後 Apgar score は 6.9 ± 2.4 点であり全例に健児を得た。初回の痙攣発作日または翌日に全例 CT を施行したが、1例は両側頭頂葉後部に出血像を認め、4例は脳浮腫を疑える所見あり、2例には異常所見を認めなかった。しかし MRI では7例全例に後大脳動脈の支配領域である後頭葉または頭頂葉後部に高信号域を認め、3例は基底核にも、1例は前頭葉にも高信号域を認めた。子癇症例全例に臨床的には後遺症はなく、現在日常生活は通常にできている。【結論】周産期の痙攣症例8例のうち2例は CT で脳出血を認め、その他6例（全例子癇症例）は MRI で後頭葉または頭頂葉後部に器質的変化を認めたことから、周産期の痙攣症例に画像診断は有用であることが示された。

P-170 周産期救急医療における妊娠中毒症の管理と出生児の費用効果分析

聖マリアンナ医大

田口泰之, 林 和彦, 荻谷卓昭, 与那嶺京子, 橋本洋子, 鈴木廉三朗, 会沢芳樹, 飯田智博, 竹内久清, 石塚文平

【目的】母体の妊娠に伴う異常は児の予後に悪影響を及ぼすことが多く、児は NICU での費用効果の高い管理が余儀なくされている。そこでわれわれは妊娠中毒症に焦点を絞って、妊婦の状況と児の NICU での管理および費用効果を検討し、産科側での母体の管理の重要性について考察した。【方法】妊娠中毒症117例を対象とした。妊娠中毒症の発症時期により4群（A：妊娠20週未満 B：20～27,C：28～31,D：32週以降）に分類し、妊娠期間、出生児体重、頭囲、腹囲、NICU 入院期間、Incubator 収容期間、酸素使用量、NICU 医療費について比較した。【成績】母体の状況と児の体格は、A,B,C,D 各群での妊娠期間と出生児体重の平均はそれぞれ、 $34w2d-1769g, 32w0d-1291g, 33w4d-1708g, 38w1d-2635g$ で、さらに対応週数平均体重から算出した体重比は B 群が最も低く、もっとも asymmetrical な児は B 群であった。各群における児の費用効果分析では、NICU 入院期間と Incubator 収容期間の平均はそれぞれ、A：63.2,B：78.5,C：56.2,D：24.1日であった。さらに保険点数はそれぞれ21,27,17.9万点で費用効果は B 群で最も高かった。【結論】妊娠20～27週に発症した妊娠中毒症の児は他の発症時期からの児に比べ低体重かつ NICU 医療費は高額であった。以上のことより、妊娠中毒症についての新生児の費用効果の削減には、この妊娠期間での妊婦の十分なコントロールが重要であり、産科側での母体の十分な管理は新生児の医療費負担を軽減し得ることが考えられる。

14日(月)ポスター

P-171 フーリエ変換赤外分析法を用いたヒト胎盤の構造解析

大分医大

西田欣広, 宇津宮裕子, 松本治伸, 宮川勇生

【目的】フーリエ変換赤外分析 (Fourier transform infrared spectroscopy: FTIR) 法は生体組織の成分の構造や機能の非侵襲的かつ非破壊的な研究手段として臨床応用が報告されつつある。今回、FTIR 法を用いてヒト胎盤の成分解析への応用を検討した。【方法】患者の同意のもとに得られた胎盤を FTIR 法を用いて解析を行った。対象は正期産の正常胎盤 ($n=10$)、糖尿病 (DM) 合併妊婦より得られた胎盤 ($n=5$)、子宮内胎児発育遅延 (IUGR) の胎盤 ($n=5$) を用いた。胎盤を胎児面から母体面に向かって3分割 (P1-3) し、それぞれの部位より得られた組織を FTIR spectrometer (JEOL, JR-100) を用いて赤外線分析 ($1000-1600\text{cm}^{-1}$) を行い、また、同一組織を用いて PAS 染色にて免疫組織学的に検討した。【成績】正常胎盤の部位における変化を 1080cm^{-1} 周囲の peak で検討した。それぞれの2次微分赤外スペクトルの peak は $P1=1081 \pm 0.4\text{cm}^{-1}$, $P2=1083 \pm 0.9\text{cm}^{-1}$, $P3=1081 \pm 1.0\text{cm}^{-1}$ と P2 と P3 の間に有意差を認めた ($P<0.05$)。また、IUGR 症例では P2 バンドの低い wavenumber への shift ($P2=1081 \pm 1.4\text{cm}^{-1}$, $P<0.05$)、DM 症例では P2 バンドの高い wavenumber への shift ($P2=1088 \pm 1.6\text{cm}^{-1}$, $P<0.05$) が観察された。さらに PAS 染色により各症例間で染色性に変化があることを確認した。【結論】我々は世界で初めて FTIR 法がヒト胎盤の成分解析に応用可能なことを示した。 1080cm^{-1} 周囲におけるスペクトル peak は糖や糖鎖、リン酸基の量的、質的変化を検出することが知られており、胎盤の生体組織においてもその差異を検出し得た。FTIR 法を用いて peak の変化を検討することにより、胎盤組織の成分変化の有用なマーカーになり得ることが示唆された。